

---

# FAIRYTAIL ~姫と半吸血鬼~

月の歌姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F A I R Y T A I L ~姫と半吸血鬼~

### 【著者名】

月の歌姫

### 【ノード】

N7684Y

### 【あらすじ】

F A I R Y T A I L のお話をどうぞ！  
ぜひ、読んで下さいね

## #01 「ジャンとの会話」（漫畫セ

作者「先にじつてお話をす……ジャンはオリキャラです……！」

? ? ? 「 なんでそれまでの？..」

作者「それが私だから……！」

## #01 「ジヤンとの出合」

時は夕方、ある森の手前に馬車が止まっていた。

「お嬢ちゃん、起きてくれるかい？」

そう言って、馬車の主は少女の体を揺さぶり、起きようとする。しかし、少女は起きそうにない。

(シーオーン。おーきーなーよー)

それを見ていた赤い髪たてがみを持つ幼竜が、腰まで届く灰金の髪アッシュブロンドの少女シオン・クラウディオに向かふと、やつとシオンは体を起こした。

「う～…もう着いたんですか…？」

シオンは眠そうに目を擦りながら主人に聞く。

「ん～…着いたってワケじゃないんだけど…」  
「からぬ妹をでこつてほしいんだ…」

申し訳なさそうに主人が言つた途端、少女の目つきが変わり、尋ねる。

「なにがあつたんですか？」

「うん……」の先に人狼の盗賊がいてね……」の辺りの村は、ほぼやられてるんだ。本来なら……お嬢ちゃんの目的地まで送り届けてやりたいが……」

「その件で……泊まるはずの宿まで襲われた……とこ「う」とですか？」

「ああ……。すまないなあ、お嬢ちゃん……」

馬車の主は申し訳なれそつに頭を下げる。

「別に構いませんよ。それに……無理言つて乗せてもらつたのは私のほうですし……」

シオンがそう言つと、主人は頭をあげた。

「やうだつたね……。私は戻らなきやいけないが……」

「あ、大丈夫ですよ？ 私、それなりに強いので……」

(アレ……それなりつてレベルじゃないよね?)

主人が心配そうにシオンを見ると、シオンは笑顔でそう答え、いつの間にかシオンの腕のなかにいたフリーはツツコんだ。

「なら…いいんだが…。それじゃあ…気をつけてね」

そう言って、主人は元来た道を戻つて行つた。

\* \*

「…行つた…よね？」

「行つた…ね」

馬車が去つた後、シオンはフリーに尋ね、フリーはそれに答えた。

「…じゃ、ケロちゃん、バッボさん、もう出でてもいいよ」

そうシオンが言つた途端、シオンの腰に付いているポーチからは、羽根の生えたオレンジ色のヌイグルミが現れ、右腕のブレスレットが銀でできたケン玉（？）がになり、同時に言つた。

「「ふはあ……シンドかつた……」」

「息ピッタリだね～ケン玉さんとケルベロスは…」

息ピッタリな二人(?)を見て、フリーが感想を述べる。

「ワシはケン玉ではない！バツボジや馬鹿者（つ……）

激怒

「バツボ…頼むから大声出さんといでや…耳、痛くなる…！」

ケン玉扱いされ怒鳴るバツボに、ケルベロスが注意する。

「すまん、ケルベロス殿。つい怒鳴つてしまつて…」

「わかってくれればええんや」

と、良い雰囲気なのにも関わらず、フリーが言つ。

「やーい、ケン玉怒られた」

「ハニーの二枚をひきりあへやう。」

# 「ボクのせいじやなーいもーん」

その瞬間、辺りの温度が下がったように感じた。

三人（？）が後ろを振り向くと、恐ろしいほどの爽やかな笑顔のシンソンがいた。

「フリー？ふざけるのも大概にしないと…私、怒るよ？」

「…スイマセン…」（汗）

三人（？）の謝罪の声が響き渡った。

＊＊

その3時間後…、辺りは闇に包まれ始めた。

「すっかり暗くなっちゃたね…」

「ウム…もうすぐ夜になるな…」

「どうか、泊まれるところあるかなあ？」

「…うーん…」

フリー・バッボ・ケルベロスの三人（？）が相談していると、

「……野宿になる……力ナへ……？」

と、遠い田でシオンが言つ。

（（（不味い！…）））

こういう時のシオンは暴走する。

それを理解すると、三人（？）はすぐ行動を起こした。

「うん、ゴメン、シオン。お願<sup>カムバツ</sup>いだから戻<sup>ク</sup>ってきて！！」（泣）

「だ、大丈夫やてー絶対に泊まるとい見つかるて！！」（汗）

「ウ、ウム……そ、うじやぞ、シオン嬢……希望を捨ててはならん……」

「……わかつてまーす……」

（（（ぜ、絶対わかつてない！…）））

三人（？）が諦めかけたその時、

「キリ、どうかしたんスか？」

その声の主は、三人(?)にとつては救いの神だった。

\* \*

声をかけてきたのは、シオンより4つ年上の12歳の少年 ジヤンだつた。

ジヤンは跳ねた黒髪に黒目を持つ少年で、この辺りで母親と共に農作物を育て、それを食べたり・売つたりで暮らしているらしい。

シオン達はジヤンとそんな会話をしながら、彼の家に向かっていた。

「へえ～マグノリアへ行こうとしてたんスか…」

「はい…でも…「こいんスよ」…え?」

シオンが答える前にジャンは遮ると、続けた。

「わかつてゐんス…あこつひのひ」とは…

ジャンは、そのまま俯いたが、すぐ咳払いをし、伸びをした。

「わへー早く家に行ひス!—ウチの母ちゃん、怒るとメッチャ怖いんスよーだからほひーー!」

「わっ!ー?」

ジャンはシオンの手を引っ張つて、自分の家へと向かって行つた。

シオンに見えないよう、涙を隠して……。

しかし……シオンはその涙に気付いていた……。

## #01 「ジャンとの出会い」（後書き）

作者「次回はナツが登場する…かも？」

ナツ「何故に疑問形！？」「

## #02 「会話」（前書き）

作者「今日は若干ですが…主人公の過去にふれたり、もう一人の主人公が出てきます！」

フリー「言つちゃだめじやん…（呆」

## #02 「会話」

「いんや～食つた、食つたあ～

「も、もつ食べれんな…」

「おなかいっぱいだよ～」

「…みんな、食べてすぐ寝ないで…。行儀悪いから…（汗）

ジャンの家で夕飯を食べ終えた直後、横になつた三人（？）に、シオンは注意した。

「別にいいっスよ。それよりシオン…汗、流してきた方がイイっス  
よ

「えつ？いいんですか？」

「ええつて、ええつて 女の子は清潔第一なんやから

そう言つたのはジャンの母・ジェーンだ。

ジェーンはジャンとは違い、ベージュの髪に黒目だった。  
だが、目は同じだった。

「じゃあ…呼ばれますね

」

シオンは笑顔でそつと廊下へ、風呂場に向かった。

\* \*

ジャンの家の風呂はいわゆるドラム缶風呂だった。だが、覗き防止の柵や雨除けのテントが張つてあり、快適だった。

「う～… 気持ちいい～」

シオンがそのジャン家の風呂を堪能していた時、頭に青年の声が響いた。

(…相変わらずガキだな…お前は…)

(あれ？シオンが話しかけてくるなんて…珍しいね？)

(…確かに…そうかもしねんな…)

シオンは驚く様子もなく、心中で相手の青年　シオンに言った。  
彼は…シオンは肌身離さず持つている、紫色に輝く宝石のペンダント・絆石に宿るもう一つの意識。

シンは暫く間をおくと尋ねた。

( で、お前は何を悩んでいるんだ? )

\* \*

シオン side .

ストライクゾーン  
直球、まさにそれだつた。

シオンは目を細め、雨除けのテントの天井を見上げ、言つた。

( … なんでわかつたの? )

( 体を共有するよつになつて 3 年 … 。それだけの時間を共に過ごせば … 分かるに決まつているだらう … )

3 年。

もつ 3 年経つのか … あの牢獄から … あの人達に助け出されて … 。  
シロン達の … 力の制御者になつて … 。  
そして … あの男に呪いをかけられ、シンと … 体を共有するよつになつてから … 3 年 … 。

( もうそんなに経つんだね … )

( ああ … )

暫しの沈黙の後、シオンが言つ。

(元に戻れるよね?)

(元に戻れるではないだろう。必ず元に戻る…だらつ、シオン?)

(やつだね)

シオンは目を閉じ、今度は気になることをシンに尋ねた。

(ねえ、シン…ジャンさんが言つてたあいつらつて…)

(恐らく…あの馬車の主人が言つていた人狼の盗賊だらつな…)

(やつぱり…)

シオンは黙つた。

シンも黙つている。

だが、ため息のようなものをつくと言つた。

(…シオン、今お前が何を考えているかは…理解しているつもりだ

…。だが、今は止めておけ…)

(うん……やつだね……)

その言葉を最後に……会話は終わり、シオンは風呂から出ぬべし、ジョン達がいる居間へと向かった。

\* \*

真夜中、居間でシオンがジャンと話していた時だった。  
音が聞こえた。

「……」

最初に気付いたのは、シオンだった。

「シオン、どうしたんスか？」

「じつ……何か妙な音が聞こえる……」

何かを齧る音と、噛み返す音、飲み下す音。  
それらが外 煙の方から聞こえてきた。

「ヤツらがきたみたいっスね……」

セツニヒジヤンは、席を立つた。

「およしょジヤンー今度こそ殺されちまつよーー。」

「大丈夫っスーー母ちゃんはシオンと隠れてるっスーー。」

そう言って扉を勢いよく開けると叫んだ。  
そこにいるであらう者達に…

「い、いい加減にするっスこの怪物兄弟ーーー。オイラん家の畠をこ  
れ以上荒らすんなら……？」

しかし、そこにいたのはジヤンの知っている者達ではなく

「……ア、アンタ…誰っスか？」

桜色の髪に鱗模様のマフラーを身に着けた少年だった。

## #02 「会話」（後書き）

作者「なにげにH口にな...シンせん...。  
それにナツ... 窃盗&つまみ食にしてる...」（呆

シン「気に入るな」

作者「こち、気にしてますな...?」

## #003 「ジヤンの決意」

その後、少年を家の中に入れた後、少年は野菜を猛スピードで食べていた。

「オバちゃん！」の野菜すりへりつまご……」

桜色の髪の少年がジヒーンに言った。

「ずうずうしこいつスよ……それはオイワと母ちゃんが……「人間のお客さんなんていつ以来かね　　つーそりつ、たーんとお食べ

」

少しムカついているジヤンが少年に文句を言つ前にジヒーンがその背中を呑き、黙らせてから少年の前に野菜を置く。

「おっ　あんがとオバちゃん！――」

そういって、やうに食べる少年にシオンが聞いた。

「ヒジルで……あなたは？」

「ほく？（オレ？）」

「……『メン。 答えるのは飲み込んでからでいいから…』」

口の中に含んだまま答える少年に、シオンは呆れていった。  
少年は飲み込むと答えた。

「オレはナツ、ナツ・ダラグールー・オマエはなんていうんだ？」

「私はシオン、シオン・クラウティオだよ……で……」「ボク  
はフリーっ」「わいはケルベロスやでー」「ワシの名はバッボじ  
やー」「……だよ（汗）」

「へへ…………つて……ん？」

紹介し終えると、ナツがバッボを見つめ……そして…

「？…ケン玉が喋ってる…？」

「ケン玉とはなんじや…………」の無礼者が

「…………」

と、約束の会話をした直後、遠吠えが聞こえた。

「！」の声って……狼？「

(…まさかー…?)

嫌な予感がしたジャンはドアを開けた

当たりだった。

「クソツ…！またか…！」

「またつて何がだ？」

ジャンは最も見たくないそれを取つて、ナツとシオンに見せた。

「ヤツらの…人狼の盗賊三兄弟からの予告状つス…」

悔しそうに拳を握りしめて…言つた。

\*  
ナツ・ジャン・ジョーンの順に風呂に入つた後、全員居間に集まり、  
ジャンが話し始めた。  
因みに……バツボはいびきをかけて眠つていたが…。

「あいつらは…オイラン家の野菜を食べてその味を氣に入つて…定

期的にここに来るようになったんだ…」

「あいつらって?」

「最近問題になつたる人狼の盗賊やな…」

首を傾げるナツをよそにケルベロスが言った。  
ジャンはそれに頷いた。

「ケルベロスのいうとおりっす。まあ、正確には三兄弟の盗賊なん  
スけどね…」

「…いつからここに来るようになつたの?」

フリーはジャンを氣遣い、心配そうに尋ねた。

「オイラん家は一か月前つスけど…この辺りに現れたのは半年前つ  
スね…」

「…」

ジャンのその言葉にケルベロス・フリー・シオンの3人が固まつた。

「半年つて…それじゃあ…」

シオンの言葉にジャンは悔しそうな辛そうな顔で頷き、シオンは口を押えた。

ただ一人…ナツはわかつてないらしいへ、頭の上に“？”を浮かべていた。

フリーはそんなナツの耳に小声で教えられたおかげで、やっと理解できた

…

「」の辺りで無事な家は…ジャンの家だけと云ふことに…

\* \*

その事実で誰もが言葉を失つた時、今まで寝ていたバッボが言つた。

「一か月か…ついばん隨分と嘗められておるのだな…。ジャンとやら…その間にお主は…自らの誇りを胸に戦つたのかな?」

「戦おうとしてるスヨー…してゆつスケビ…ーー」

ジャンはバッボの言葉に立ち上がると怒鳴つたが…あにつらに立ち向かった時のことを思い出し、黙つてしまつた。

「…ムリなんスよ…こや戦おうとする…足が震えて…戦えない

「んスよ…。あにつりに…“意氣地なし”つていわれても…言ひ返せないんス…」

「そりやあ…いわれてもしかたり…ぶつ…?」

ナツが余計なことを言ひ前に、フリーがナツの頬を殴つた。

「いつてえ……なにすんだよーー?」

「ナツ…その先は言ひちやダメだよ…」

「なんでだよーー?」

「あれ見ればわかるやろ…」

そこには、椅子に座るとテーブルに突つ伏し、何度も悔しそうに咳くジャンの姿があった。

そして、その傍にはジエーンがいた。

「ケロちゃん(ケルベロスのこと)…相手の人狼達…元々は殺す事も躊躇<sup>ためら</sup>わない残虐な盗賊なんだよ…だからこねは仕方ないことなんだよ…」

「けどいいのオバさん!/? 煙が荒らされてもー?」

「別にいいわ…野菜はまた作り直せばいい…けど、ジャンは取り返

しきかない。私のたつた一人の肉親だからね……」

その言葉で、誰も何も言えなくなり、ひとまず解散した。

\* \*

シオンは…青紫色の空に包まれ、青と赤の月が重なりあつてゐる不思議な世界にある、薔薇の庭園の真ん中にある噴水の前にいた。でもそこは…世界のどこにも存在しない場所だつた。

何故ならここは…シオンの心が生み出した“心の世界” いつてみれば精神世界だからだ。

シオンがここに来る用はたつた一つだけだ…。

「呼んだか? シオン」

「シン!」

そう…シンに会うためだ…。

シンは灰色の髪に紅と深緑ふかみどりの虹彩異色オッドアイの瞳の青年で、シオンとは一

20歳上の20の青年だ。

だが彼は…年を取らない、否…取るのが遅いのだ。

もちろん、シオンは理由を知っていた…が、今はその話はやめておこう。

今回、シオンがここに来たのは彼に相談するためだ…。

「シン、話があるの…聞いてくれる?」

すると、シンは鼻で笑い言った。

「愚問だな…俺は元からそのつもりだが?」

\* \*

その次の日の昼、ナツ・フリーは農作業中のジャンに話していた。因みにシオンは家でジェーンの手伝い、ケルベロスとバッボはナツ達と一緒にいた。

28

「ねえジャン!! ボクたちにまかせてよ!!」  
「何をつスか?」

「人狼三兄弟の退治だよ!! 予告状がきたつことはソイツら來るんだろ!!?」

二人の発言にケルベロスが驚いた。

「本気かいな?! フリーはともかく、ナツは大丈夫なんか!?!?」

「「それどーゆー意味!?!?」」

フリーとナツがハモつた直後、バツボが言つた。

「ほお  
つ  
」  
つ…カツ「よいのぉフリー！ま、ガンバルのじやぞ

「何いつてんの？ケルベロスもバッボもやるんだよ？」

「わいも！？」 「なんでじや？」

「だつてケルベロスうーー頑張つたらシオンの特製デザート食べれるかもしれないよ？それに、バッボは紳士なんでしょう？紳士は困つてる人を助けるものだと思うなあーーー」

その言葉で、二人（？）のスイッチが入った。

「ふつ……致し方あるまい……紳士としては……見過せぬなあ……」

と、盛り上がりつてゐる二人（？）をみて、ジャンは笑つた。

「フリー、ナツ、ケルベロス、バツボ…アンタラ…いいヤツつスね

… けど、ケツコウー…

その瞬間、ケルベロスとバッボの上に“ガーン”といづれの石が落ちてきた。

「な、なんでだよ…？」

「オイラとしてもありがたいつスよ?でも… それじゃあダメなんス! オイラは… オイラは

「オイラは自分の力で道を開きたいんス!! そして… 意氣地なしを捨てるんス!!!!」

そう言い切つた。

「ジャン…」「よせフロー」バッボーでも……！」

「今のジャンの言葉を聞いたじゃらひ…彼は今、眞の男になひつとしておるのだ…察してやれ…」

「…うん…」

フリーはまだ納得がいかないよつだつたが、渋々了承した。因みにバッボの発言はこの後、「今のワシどつじやつた?！」の一言で帳消しになつたといつ。

## #03 「ジャンの決意」（後書き）

作者「バツボカツコ悪つーーー（笑」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7684y/>

FAIRYTAIL ~姫と半吸血鬼~

2011年11月30日19時48分発行